南紀生物，39(1)：77-78，1997

八重山列島，西表島へ再び漂着したチレニアイガイ

久保田　信*・島　袋　ときわ**

Shin KUBOTA and Tokiwa SHIMABUKURO: The blue mussel drifted ashore again on the coasts of Iriomote Island, the Yaeyama Islands

はじめに

沖縄県沿岸にはチレニアイガイ *Mytilus edulis galloprovincialis* LAMARCK の分布がまったくみられないものの，ブイに付着して成長した外国産のチレニアイガイの漂着があることを報告した(久保田・林原，1995；久保田・島袋，1996)。このような漂着は，近年，慶良間列島の阿嘉島で繰り返しておこり（久保田・林原，1995)，西表島でも過去にそのような可能性があったことを推察した（久保田・島袋，1996)。黒住（1995）も約20年前に八重山列島の波照間島で本種の漂着があった可能性を指摘している。本報告は，西表島でチレニアイガイの付着したブイが再び漂着したので記録するものである。加えて，ブイに付着していた他の軟体動物4種およびその他の主な付着動物についても記す。

ブイに付着して西表島へ漂着したチレニアイガイ，他の軟体動物，および付着動物

1996年の2月下旬から3月にかけて，西表島の少なくとも3箇所にチレニアイガイの付着したブイが漂着した。中野の浜で19個と最も多数のブイを発見し，網取で10個，宇奈利崎で6個を発見した。ブイのすべてにチレニアイガイが付着してはいなかったが，また付着していてもその数には多少があったが，本報告では，最も多数のチレニアイガイが付着していた1個のブイ（図1）について観察した。なお，宇奈利崎のブイのみ発泡スチロール製で，他はプラスチック製，黒色であり，同一の製品と思われた。西表島では冬季に漂着物が多く，それらの中には台湾，中国，韓国製の物がある。今回発見したブイがどこから漂流してきたのかは不明であるが，外国製のブイである可能性が強い。

採集場所　沖縄県八重山郡竹富町西表，中野の浜
採集日　1996年2月25日
基質　プラスチック製ブイ（球形，直径25 cm）

チレニアイガイ（N=51）のサイズ組成

前後軸長（mm）	個体数
21-25	1
26-30	9
31-35	15
36-40	16
41-45	9
46-50	1

他の軟体動物

ホトトギスガイ	13個体
カキの一種	23個体
？カサガイ類の一種	4個体
カサガイ類の一種	1個体

その他の主な付着動物

フジツボ類（ブイの赤道面を被いつくす）
コケムシ類
群体ボヤ類

以上のように，たった1個の小さなブイであるにもかかわらずチレニアイガイやフジツボ類の多数個体が付着

図1　漂着したブイに付着するチレニアイガイおよび他の付着動物

しており，また，上記のいずれの付着動物も成体サイズに達していることからラフティングによる分布拡大の潜在力となりうる（ただし，このブイは漂着直後のものではなく，付着動物の多くの個体は死亡していた）。今後も西表島に限らず南西諸島全体で漂着記録をとり続けることが必要である。なお，上記の標本は，乾燥標本として久保田が保管している。

南西諸島からは地理的には遠く離れているものの，小笠原諸島でもチレニアイガイの多数の個体が近年漂着し，1個体は磯浜に付着していた例が報告されている（立川，1996）。なお，本種が小笠原諸島沿岸に漂着した基質もプラスチック製のブイであった。

引用文献

久保田　信・林原　毅．1995：慶良間列島，阿嘉島へ漂着した多数のチレニアイガイ．みどりいし，6，17-19.

久保田　信・島袋ときわ．1996：八重山列島，西表島で初めて採集されたイガイ属2種（軟体動物門，二枚貝綱，イガイ目）．南紀生物，**38**(1)，27-28.

黒住耐二．1995：八重山列島へのムラサキイガイの漂着？例．ちりぼたん，**26**(2)，62.

立川浩之．1996：小笠原諸島でのムラサキイガイの採集例．ちりぼたん，**27**(1)，7-9.

南　紀　生　物

第39巻　第1号　別　刷

Reprinted from
NANKISEIBUTU : The Nanki Biological Society
Vol. 39,　No. 1
May 1 9 9 7